

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑤

訳経史とその背景

後漢の時代に安世高から始まった漢訳は、北宋までの約千年間にわたり断続的に続いた。初期の頃には安息（パルティア）、月支（月氏）、康居（ソグディアナ）、龜茲（クチャ）などの中央アジア諸国出身の出家者らが中国へ渡り漢訳に従事した。当時は出身地を名字にする習慣があったので、安息の安世高や、月支の支婁迦讖、康居の康孟詳など、渡来僧の名字からその出身地がわかる。

インドから北へ向かった仏教はガンダーラを経て中央アジア諸国へとひろまり、仏典はその地域の諸言語に翻訳された。西域からの渡来僧は多くの仏典を中国にもたらし、インド諸語のみならず、西域諸語に翻訳された仏典も漢訳されるようになっていった。また、彼らが暗記していた口伝の教えも中国に伝えられ漢訳された。

中央アジアの渡来僧によってはじまった漢訳は、中国における仏教受容の礎となり、その教えが次第に受容されるにつれて、漢人仏教者らも漢訳に従事するようになっていった。約千年にわたる訳経史には数多くの訳経僧が登場する。中でも4世紀に活躍した亀茲国出身の鳩摩羅什と、7世紀に活躍した漢人の玄奘の二人は、顕著な功績を残した訳経僧として特に有名である。

訳経史は旧訳の時代と新訳の時代に大きく区分される。この二つの時代は玄奘を境にしており、玄奘より前の時代を旧訳、玄奘以降を新訳の時代と区分される。これは玄奘がそれまでの漢訳を刷新し、新たな翻訳論を打ち立てたからで、彼の翻訳はその後の東アジアの仏教に大きな影響を及ぼした。また、旧訳の時代をさらに分けて、鳩摩羅什より前の時代を古訳の時代、鳩摩羅什以降を旧訳の時代とする区分もあるが、本稿では便宜上、旧訳、新訳という時代区分をもとに紹介したい。

訳経史を理解するために、その方法論として大きく二つの視座がある。一つは、訳経僧によって漢訳された内容を分析、比較する仏典の内観という視座である。もう一つは、訳経と訳経僧の事績や翻訳事情を記した「経録」（経典目録）をもとに理解する仏典の外観という視座である。

文献学的な考察の上で、仏典の外観という視座はインドにおいては成立しえない。なぜなら、仏典を通時的に外側から把握し論述した記録がインドにおいては皆無であるからだ。しかし、中国では年号が明記された経録が作製され、それらは歴史的資料として有用である。本稿では、仏教の受容と変容の歴史を紐解くために、仏典の内観として、仏教語の漢訳の変化に注目しつつ、『出三蔵記集』という経録からその外観を理解し、訳経史の諸相を俯瞰したい。

4世紀に釈道安が編纂した『綜理衆経目録』は、後漢から西晋時代までに訳出された約639部の経典を網羅していたと伝えられているが、これは散逸し現存していないため、まとまった経典目録として6世紀初頭に編纂された『出三蔵記集』が現存最古のものとなる。これは、梁の学僧、僧祐が編纂したもので、経典名と翻訳者が列記されている。この経録には釈道安がまとめた『綜理衆経目録』の内容が多く含まれており、彼の功績を窺い知ることができる。

経録が編纂された背景には、外来の仏教を受容するために長

い時間をかけて膨大な漢訳仏典をうみだした中国仏教特有の問題が存在する。

漢訳が始まったころ、中国人にとって仏教はまだ異質のものであり、その教えを理解する基盤が整っていなかったと思われる。仏典の言葉が漢訳されたにもかかわらず、教理を全く知らない漢人にとって、訳語から未知なる教えを理解することは不可能であった。さらに、中国人の思惟方法は、老荘思想や儒教などの在来の伝統的な思想に基盤を持っており、まったく異質のインド思想をそのままの形で理解することは至難であった。インド的思惟に根差した仏教のもつ教理概念を中国人が理解するには、文化的・思想的な溝が存在していた。その溝をいかに埋めるかが中国における仏教伝播の初期段階での課題であった。これは仏教に限ったことではなく、異なった文化圏への伝道を試みる宗教においては、どの時代、どの地域であっても避けられない普遍的な問題である。

そのような状況の中で、初期には中国人への仏教宣布のために中国古来の思想をもって仏教を理解し講述する試みが行われていた。これは、煩瑣なインド的仏教の教えを、類似する老荘思想など中国の伝統的思想に基づいて理解する方法である。このような仏教理解は「格義仏教」とよばれる。この格義に関して常盤大定は「仏教を解釈するのに、老荘を以てするをいふ。之が為に仏教は仏教本来の精神を發揮せず、(中略) 仏教は寧ろ老荘思想に習合せりと見るべし。」と指摘している(常盤, 1941:4)。老荘思想に伝わる教えや術語などを用いて咀嚼、消化された中国式仏教理解は、仏教の本来の教えを歪曲あるいは変容させるものであり、インド仏教の正統解釈とは言い難い。しかし中国での仏教受容の初期段階において、特に知識階級に漢訳仏典を受容させる上で、格義仏教は便宜的手段として一定の役割を担っていたと考えられる。

また、極端な中国的仏教理解は仏典そのものにも影響し、釈迦は老子の生まれ変わりであるという荒唐無稽な内容を説く『老子化胡経』など、伝統教理にまったく根拠を持たない經典などもつくられるようになった(水野, 1990:136)。このような經典は「偽経(疑経)」とよばれ、中国における仏教受容を促すために意図的につくられた。

訳経史の背景には、様々な系統の多様な仏典がランダムに将来された中国特有の事情がある。たとえ同じ仏典であっても伝来時期により同異がままあり、非常に混乱していたようだ。それらは漢訳によってさらに複雑に交錯し、雑多な典籍群となって拡散した。

このような状況から、仏教が中国に浸透するにつれて、次第に正しい仏教理解を希求する漢人仏教者らが現れるようになった。彼らは格義仏教を排除し、その思想的枠組みからの脱却を目指した。そこでまず、上述の経録が編纂され、漢訳仏典が整理されることになった。その意図するところは、訳者や訳語、伝来時期が異なる膨大な量の仏典の情報を比較精査し、その内容吟味から高低或いは真偽を決するという非常に困難な知的操作「教判(教相判釈)」を行うことであった。

[引用文献]

常盤大定『支那仏教の研究』春秋社、1941年(第二刷)。

水野弘元『經典—その成立と展開』佼成出版社、1990年。